

透明

毒吐き道化

普通、なんて当然のものじゃない。

「こんな普通じゃん」なんて、当たり前のように言う人が多いけど、でも普通なんてないんだよ。だから、後悔のないように生きるべきなんだろう。――けど、そんな勇気がないのが私という生き物なのだ。

*

「――え？」

つつい驚いた声を上げてしまった。しかし、私と同じ状況になれば、誰もが同じ声を上げている。むしろ私は落ち着いている方だろう。

指先が、なかった。起きたら、左手の指先がなかったのだ。

「夢？」

とりあえず、右手で頬っぺたをつねってみた。

――痛い。ということは、夢ではない。

左手の指先を見てみると、「白と赤」が見える。つまり、骨と肉だ。しかし、痛みは全くない。寝ている間に何があったのか、思考を巡らせながら指先に触れてみた。

「ある」

その左手の指先には感触があった。見えないけれど、確かに指先の柔らかい感触があるのだ。

「――どういうこと？ やっぱり夢、なのかな」

何度触ってもやはり指の感触。そう。まるで、指先だけ透明人間になってしまったかのよう。――寝床から出ることが出来ないまま、透明な指先を眺めるのであった。

「とりあえず、これでいいかなあ」

どうしようもないため、薄手の手袋をはめた。病院へ行くことも考えたが、こんな透明の指を治せるとは思えない。下手をすれば、研究材料にされるかもしれない。――そんな映画を昔見た気がする。異端は隔離され、研究材料となるのだ。世知辛い世界だ。

「さすがに手袋は暑いけど、仕方ないか」と、呟いていると携帯が鳴った。画面を見ると、友達の理恵の名前。

「もしもし？」

電話に出ると、明るい声がした。「もしもし、亜紗深一？ これからカラオケ行かない？ 今日、午後からの授業だったよね」という普段と変わらない明るい声。

「うん、行くよ。いつものところだよ」と、だけ返して電話を切った。このまま一人考え込んで、暗くなる気がした。それだったら、友達と騒ぐ方が気が紛れるだろう。そう思い、亜紗深

は部屋を出るのであった――

「亜紗深、おはよー！ 午後からの授業だったら三時間くらいは歌えるよね」と、理恵は言いながら、早速曲を入れている。

「だね。あのさ、理恵」

亜紗深はマイクに手を伸ばす理恵に話しかけた。

「何？」

「もしもさー、もしも。朝起きて、透明人間になってたらどうする？」と、唐突に亜紗深は聞いてみた。――深刻な感じにならないように気をつけながら。いつも通りを装って。

「え？ どうしたの、急に」と、理恵は可笑しそうに言う。

「ん、いやー。昨日さ、透明人間が出てくる本を読んだんだよねー。起きたら急に透明人間になってる、って話」

「また、本の話？ 亜紗深は本が好きだよな。さすがは文学部だわ。そうだねー、やっぱ一度は男のロマンでもある覗きでもするかな！」と、理恵は爆笑する。

「うわっ、変態ー」

「見た目は女、心は男ですから！」

曲が始まり、理恵は画面に目をやる。そして、「でも、やっぱ、自分の欲望に正直に振舞うと思うよ」と、続けて歌い始めた。

「そっかー……」

亜紗深はいつもと変わらない笑顔で答えて、微かに俯いた。耳には理恵の綺麗な歌声と、自らのすすするウーロン茶の音が届くだけであった――

「さて、どうしようかなあ」と、亜紗深は呟いた。結局、今日の授業はあまり身に入らなかった。授業中もずっと手袋の下の指先の感触を確認してしまうのだ。

指先のことを考えながら自転車をこいでいると、いつの間にかマンションの前に着いていた。そして、いつもはきつく感じる六階までの階段も駆け上がり、部屋へ飛び込む。無論、いの一番に手袋を取った。「あっ……！」と、亜紗深は声を上げる。

――朝は指先だけが透明であったのに、今は左手全部が透明になっていた。

どンドン、透明が浸食していく。その体を。

「……どうしよう」と、ここで初めて青ざめた。少し震えながら、玄関に座りこむ。

最初はまだ現実感がなかった。しかし、今やこれは夢ではないと確信出来る。

「私、どうなるのかな……」

左手に触れる右手は、その震えを確かに感じていた。どうすればいいのかわからない状態に、戸惑うことしか出来ない。――このままでは、全部透明になってしまうのだろうか、と。そうなれば、誰にも自分の姿は見えなくなる。はたして、それは本当に存在している、と言えるのか。

亜紗深はふらつきながらも、何とか立ち上がる。そして、大きな鞆に衣服を詰めて、再び家を出た。

「良かった、明日が土曜日で……」と、ため息にも似た声を絞り出す。

亜紗深は電車に飛び乗り、実家へと向かった。電車に三時間も揺られれば、家に帰り着く。到着は夜遅くになるが仕方がない。

『今から、家帰ります。土日はそっちに泊まるつもりだから』

いつもとは違う、絵文字のない淡々としたメールを母に送った。すると、すぐに携帯が鳴り、返信が来る。『突然どうしたの？ そっちで何かあった？ とりあえず、駅で待ってます。着く前にまたメール下さい』と、同様に絵文字のないメールがそこにはあった。いつもと変わらない、母親の温もりを感じた。

「……お母さん」

誰にも聞こえないくらいの小さな声で亜紗深は呟いた。自分の世界に各々入り込んでいる乗客たちは、そんな亜紗深の声に気がつくことはなかった――

「久しぶり」と、乾いた声で亜紗深は言った。

そこには半年ぶりに見る母の姿があった。

「そうね。ほら、荷物持つよ」

母は亜紗深の答えも待たずに荷物を持った。微かに触れた手は、やはり温かい。透明な左手は、ドキリと震えた。

「大学はどう？ ちゃんと、勉強してるでしょうねー？」

車中で母は明るい声でたずねて来る。

「当たり前でしょ。私は真面目だけが取り柄ですからー」と、亜紗深も明るい声を上げる。けれど、きっと母は気付いているのだろうと亜紗深は思う。明るい声の裏にある不安に。十八年も母親をやっているのだから。

「ま、ゆっくりしていきなさいよ」

不安な思いの亜紗深に、母の優しい声が染み渡っていくのであった――

うるさい携帯のアラームに起こされた。階下からは、昔と変わらないお味噌汁の匂いがする。念のためにしていた手袋をはぎ取り、亜紗深はそれを見つめる。やはり、左手は透明のままだ。――恐る恐るパジャマの袖をまくる。

やはり、浸食は進んでいた。もう、左腕は完全に消えている。

「……やっぱ、そうだよ。何だよ……小説みたいじゃん」

口を尖らせる亜紗深。――強がらなければ、きっと泣いてしまう。

再び、左手だけ手袋をして居間へ行く。

「あんた、手袋なんてしてどうしたの？ これから朝ごはんよ？」

母は不思議そうに、亜紗深の左手を見つめる。

「……ん、ちょっと怪我してるの。気にしないで」と、ぶっきらぼうに言い放った。

「そう。まあ、大した怪我じゃないのね？」

母は亜紗深の「それ以上は聞かないで」という雰囲気を感じ取ったのか、それ以上は追及してこなかった。

静かに席に着いて、お味噌汁を一口すすった。父はもう仕事に出ているため、二人だけの朝食だ。まずは咀嚼する音と、行方不明者のニュースを伝えるアナウンサーの声だけが耳に入る。

「ねえ」

まず口を開いたのは亜紗深だった。

「もしもさ、私が突然居なくなったらどうする？」

つとめて普段と変わらない口調で訊ねた。

「いきなり、どうしたのよ？ 変な子ね。また、小説の話かしら？ そうねえ……そりゃあ、悲しむでしょ。あ、でもその前に探すわよね。死んだ確証もなく諦められないから、探すわ。一生かかってでも、必死に探すわよ！」

母は笑顔の中に、真剣な目で亜紗深を見つめた。

「そう。そっかー、いきなり変なこと聞いてごめん。今度の本の課題でさ、色々意見を述べなきゃいけないから、その参考にさ」と、自分でも苦しいな、と思うような言い訳めいた説明をした。母は「そう」とだけ答えて、またご飯を食べ始める。

亜紗深は久々に母の作ったご飯を食べあげると、小さく「ごちそうさま」を言って、再び部屋へと戻るのであった。

「どうするかな……」

亜紗深は呟いた。インターネットで「透明 病気」などと検索して見たが、まともなサイトが出るわけもなかった。仕方なく机に突っ伏せるしかない。母に言おうかとも思ったが、ただ驚かせるだけだろうし、「病院に行け」と言われると思った。それに、もし化け物を見るような目で見られたらどうしようか、と不安になった。もちろん、自分の母がそんな目で見るとは思えない、と信じている。しかし、それでも怖いという思いが拭えないのが本音だ。

――でも、やっぱ、自分の欲望に正直に振舞うと思うよ。

そんな理恵の言葉が蘇った。

「やりたいことをやってた方がいいのかなあ」と、呟いた。

この先、どうなるかはわからない。

全身透明になるのかもしれない。今の状況を見ると、それが一番予想される。そして、その先は？ ――わからない。

ふたたび、体が見えるようになるのか。透明人間のまま生き続けることになるのか。それとも

、意識すら消えてしまうのか。

昔、「もし明日、世界が滅んでしまうとしたら何をするか」なんていうことを話したことがある。有りがちな話題だ。その時は確か、「全部貯金をはたいて遊びまくって、食べたいものを食べまくる」と、答えた気がする。

けど、「もしも」だから話せることなのだ。実際、同じ状況になれば、大半の人が何も出来ずに慌てるだけではないのだろうか？

亜紗深自身、自分が「透明」になるだなんて思ってもみなかった。

もちろん、このまま何もせずに消えてしまいたくはない。

「私が、したいこと……？」

机に突っ伏したまま呟いた。何も思いつかない。いや、正確に言うと、思いつかないのではなく、実行する勇気がないのだ。

「――伝えようか」

脳裏に浮かぶ、ただ一人の顔。ずっと、片思い。別に片思いでも良かった。だから、今まで想いを伝えることもなかったのだが。

かれこれ、二、三年は片思いを続けているのだろうか。その想いはまっすぐで、他の誰かに揺らぐこともなかった。だからこそ苦しいのかもしれないが。

「けど、勇気が……出ない」

もしかしたら消えてしまうかもしれないのに、ここで伝えなかったら、消える瞬間に後悔することはわかりきっている。――でも。

「――無理だ」

歯を噛みしめながら机を叩く亜紗深。いっそ、貯金をはたいて豪遊でもしようか、と思ったがそれはあまりに馬鹿らしい。

「……ここで、こんなことしてても仕方ない」

亜紗深は勢いよく立ちあがる。

その自分の姿が鏡に映る。――鎖骨の辺りも透明になっていた。向こう側の本棚が見えている

。

「嘘でしょ……」

ベッドに倒れこみたい思いを押さえながら、ストールを手早く巻く。これでしばらくはどうかかなるだろう。

「行ってきます！」

どこに行くかも伝えずに家を飛び出した。母の呼びとめる声が聞こえた気もするが、気にしないことにする。

その足は学校へ向いた。自分の青春が詰まっている高校だ。部活に励み続けた三年間が詰まっている。

「……やっぱ、たった一年じゃ変わることもないよねえ」

しみじみと呟いた。

土日ではあるが、部活が盛んな高校であるため、部活に励む生徒の姿で賑わっている。そんな

汗水を流す生徒たちを横切って、校舎に入った。

「――やっぱ、四階まではきついんだよなあ」と、ついつい不満をもらしながら階段を上った。上った先には懐かしい美術室があった。

「久しぶりー」

扉を開けると同時に、後輩の姿が飛び込んできた。

「あ、先輩！ お久しぶりです！」

「やっぱ、田宮だけか。ま、美術部は自由だからねえ。……油臭いよ。ちゃんと窓開けなきゃ」

田宮の広げる油絵の具の匂いが美術室に充満している。昔のように、窓を開け放した。

「……あ」

つい上げてしまった声に田宮が顔を向ける。「何でもない」と笑いながら、窓の外を見つめた。

校庭の隅の木にもたれかかりながら煙草を吸う一人の男の姿。

「あ、菊川先生ですね。また煙草吸ってる～。校内禁煙なのに！」

いつの間にか隣には田宮の姿があった。

「ま、いいじゃない。教師はストレス溜まるだろうからね。モンスターペアレントとかさあ」

「ですけどね。ま、郁也先生とかは美術準備室で吸ってるんで、それに比べればマシですけど……」

そんな田宮の言葉に、確かに自分も準備室に染み付いた煙草の匂いに怒っていたことを思い出した。顧問だった郁也先生の飄々とした表情が思い出される。きっと、土日は学校に来ていないだろうから会えないのだが。

「でも、月矢先輩！ いきなりどうしたんですか？」と、田宮は訊ねる。長期休みでもないのに来たのだ。当然の疑問だろう。――だからといって、「透明人間になったからだよ」とは言えるはずもない。

「ちょっと実家に用があったから、そのついで」と、曖昧に答え、「ま、ちょっと寄っただけだから、絵描いてなよ。そろそろ展示会の時期だから忙しいでしょ？ 他の部員に田宮の爪の垢を煎じて飲ませてあげたいもんだ」と言った。油臭い部室には田宮の姿しかない。

「あはは、まあ。私は絵が大好きですからね。それを言ったら先輩だって真面目な部員だったじゃないですか！」

田宮は笑う。

「私の取り柄は真面目、だからね」

亜紗深は微笑んだ。別に田宮ほど熱狂的に絵が好きというわけではない。正直、真面目な性格でなければ、ずっと嫌々部室に来ていただろう。

――そんな私が部室に来ていたのは。

亜紗深は昔の定位置に椅子を持ってきた。いつも、この位置で絵を描いていた。窓の外に見える風景に目をやりながら。

「菊川先生」

田宮には聞こえないであろう大きさに呟いた。

そこは、菊川が煙草を吸う定位置。いつも、そこを眺めていた。ヘビースモーカーの菊川は頻りにそこに現れた。片思いの先は、窓の外にあったから。――きっと、幼い恋心だと思っていた。だけど、今だにその胸に残っている。これが「愛」でないのなら、何というのだろう。

「……じゃあ、行くよ。頑張ってるね？」

亜紗深は田宮に微笑んだ。田宮はキャンバスから目を離し、「もう行くんですね……あ、また来てくださいね！」と、言った。

「うん。また、来るよ」

それだけ言って美術室を飛び出した。もう来ることなんて出来ないかもしれないのに。嘘などあまりついたことがない亜紗深は少し悲しくなった。もし行けたとしても、その目に姿が映らないかもしれない……なんて、言えなかった。

「ただいま」と、言うと同時に、夕飯の美味しそうな匂いが飛び込んできた。玄関には父の靴もある。

「おかえりー」

土曜日でも仕事に行くぐらいの仕事人間が、五時前に家に居た。気をつかったのか、それとも母に言われたのか。ともかく亜紗深は少し居間に顔を出し、父の姿を確認した。「おかえり」と、テレビから目を離して亜紗深を見た。

「ただいま」とだけ亜紗深は答え、部屋へ行く。

さすがに室内でストールを巻いているのは不自然だ。タートルネックの服に着替え、すぐに食卓につく。

「いただきます」と、小さく言って食事を始めた。一番喋る母が、場を盛り上げるように話し始める。

もしかしたら、これが最後の食事なのかもしれない、と亜紗深は考えると俯くしかなかった。一回一回の食事が「普通」だなんて誰が言っただろうか。誰も言っていない。勝手に人間が勘違いしただけじゃないか、と亜紗深は思った。

全部、「普通」のことだと思っていた。毎日の出来事も、人との会話も。もし、自分が透明にならなかつたら、きっと親の温もりにも、親が死ぬまで気がつくことはなかつただろう。――泣きそうになった。

「美味しいね」

頑張ってる笑みを作り、亜紗深は言った。そして、「ごちそうさま」を言う。前はご飯を食べたら、すぐに部屋に行ったが、今日は居間でテレビを見ながら、親と談笑した。

そして、二人が眠りに着くころ、亜紗深も自分の布団にもぐった。

もちろん、簡単には眠りににつけない。

「――どンドン、消えちゃうよ」

亜紗深は消え入りそうな声で呟く。お風呂に入ったとき、それは更に浸食していた。それは右肩に迫り、胸の下まで透明になっていた。せめてもの情けなのか、まだ顔は透明になっていない

。顔まで透明になってしまえば、隠しようがなくなる。

「後悔のないように。自分に素直に……」

亜紗深は今だ体温を感じない布団の中で、丸まりながら呟いた。後悔のない選択を選ぶのなら、ずっと片思いをしている菊川に想いを伝えるべきだ、とわかっている。同時に、わかっている行動出来ないのも自分なのである、ということも亜紗深はわかっていた。

けれど、こうやって悩んでいる間にも「透明」は浸食してきている。「どうすればいい？」と、ただ呟くことしか出来ない間に。

そんな亜紗深の頭には菊川の姿が浮かぶ。このまま、消えていくのはあまりに悲しいじゃないか、と。この想いを伝えれば、例え自分の姿が消えたとしても、菊川の頭の中には「月矢亜紗深」という存在が残るかもしれない、と。

――考え事をしているうちに、もう三時になっていた。もちろん、まだ外は暗い。けれど、おそらく考え事で苦しむ頭は眠りに着くことなど出来ないだろう。

亜紗深は起き上がり、まだ寒さを感じる空気に身をさらした。親を起こさないように階下へと下りる。手袋を取って、左手を伸ばす。やはり、指先の向こうの景色が見える。そして、右手も透明になっていた。亜紗深は涙を何とかこらえる。

居間はやはり肌寒い。いつもは母が一番に起きて、居間を温かくしてくれていた。寒さが身にしみる。

「――そうだ」

居間に入ると、するわけがないのにお味噌汁の匂いがした。いつもの母の匂い。

「たまには私が作ってあげよう」と、呟く。たまには、ではなく、「最後に」なるのかもしれないが。

台所に立ち、具材を切った。母のようにリズムカルな包丁さばきとはならない。形もまちまちで美しいとは言えない。それでも、手順を頭に思い浮かべながら、お味噌汁を作り上げた。母のものとは程遠い出来に違いない。――それでもいい。自己満足なのかもしれいけれど。亜紗深は一口お味噌汁をすすって、そんなことを考えた。

『ごめん。急だけど、今から帰ります。お味噌汁作ったから飲んでください。 亜紗深』

短い文面の手紙をテーブルに置いた。すぐさま鞆に荷物を詰めて家を飛び出した。きっと、おかしいと思うに違いない。けれど、本当のことなど言えないのだ。――誰にも。

亜紗深は人のいない公園のトイレに飛び込んだ。確認すると、すでに透明でない部分などなかった。亜紗深は涙をこらえて、服を脱ぎ捨てた。それも鞆に詰め、ゴミ箱に押し込む。靴のない足裏は冷たく、地面の感触だって痛い。けれど、亜紗深は走った。何となく、頭の中がグラグラする。まるで、脳内ですらも透明になってきているかのような――

「嫌だ、嫌だよ……」

亜紗深は走った。足の痛みなんて関係ない。服のない寒さだって関係ない。――こんな早い時間でも通勤なのか、出歩いている人たちがいる。無論、透明になった亜紗深に気付く者など居ない。

ここまでくると、亜紗深の中に裸である恥ずかしさなど微塵も存在しなかった。どうせ、誰に

も見えないのだから。

「やっぱり、言いたいよ……！」

一度だけ送った年賀状。その時の菊川の住所を思い返した。マンションの番号まで正確に浮かぶ。――もし、そこから引っ越していたら？　そこまで、亜紗深は考えていなかった。走るという選択しか、今はなかったから。

「好き……なんだから」

亜紗深の脳裏に菊川の笑顔が浮かぶ。「何で？」って聞かれたって、「いつの間にか目を奪われてた」としか言えない。強いて言うなら、辛い時期に「無理はするな」って、ぶっきらぼうに言われたことがきっかけ。些細なことかもしれない。――だけど、好きなのだ。好きとしか言えないのだから仕方がない。最後に浮かんだのが、菊川の姿なのだから。

「まだ、お願いだから……もう少し……！」

亜紗深は空に叫ぶ。意識がどこかへ行ってしまいそうだ。――自分が消えてしまう気がした。もしかしたら、テレビで流れる行方不明者のニュースだって、今の自分と同じ状態の人なのかもしれない。そんなことを亜紗深は考えた。その人たちは、消える前に何をやったのだろうか？

――考えたところで答えは出ない。

「まだ……！」

亜紗深は消えそうになる意識を押さえつけるために、自分の頬を見えない右手で殴りつけた。

「こんな理不尽なこと……あつてたまるかっ！」

誰にぶつけていいのかわからない怒りを、ただ空に向かって叫んだ。この世に神様が居るかさえわからないのに。

何故、いきなり自分にこんな出来事が降りかかったのだろうか？　けれど、きっとこうなっていないければ、たくさんの大切なことに気がつかなかった。――愚かだ。けれど、人間なんて皆そうに違いない。

あと、少し。角を曲がれば、菊川の住むマンションに着く。亜紗深は己を奮い立たせた。

「菊川、先生……！」

このまま人生が続いていくとして。――隣に菊川が居れば幸せなんだろうな、と亜紗深はずっと思っていた。あの陽だまりのような存在がずっと、隣に。まさか、自分の方が先に居なくなってしまうなんて、少しも考えていなかった。

亜紗深は三階までの階段を駆け上る。心臓が飛び出しそうなほど、ドクドクと脈打つ。けれど、今はそんなことなど気にしてられないのだ。もし、表札に「菊川」の名前がなかったらどうしようか、亜紗深はそれだけが心配だった。部屋番号を脳内で反芻し、走る。

「……あつた」

それは、泣き声にも似た声。今までにないくらい走ったせいで、部屋の前で膝をついた。走りすぎて吐きそうだった。表札は愛しい人の名前に間違いなかった。

亜紗深は膝をつきながらも、呼び鈴を鳴らす。何度も鳴らす。出てくるまで鳴らすつもりだった。――何度目かの音ののち、扉が開いた。やはり寝ていたのだろう。何とも言えない、不機嫌そうな顔。もはやそれすらも愛しいのだから、盲目としか言いようがない。

「……いたずらか？」

菊川は誰も居ないのを確認して、再び扉を閉めた。無論、その間に亜紗深は部屋に入り込む。気持ち程度、足裏の砂を払い落とし、部屋へ忍び込んだ。独身男性らしい散らかりようではあった。

菊川はベッドに座り込むと、しばらくは考え事をしていたようだが、すぐに布団にもぐり込み寝息を立てていた。

亜紗深は菊川が寝たのをいいことに部屋を見回した。豆電球しか点いていないため、部屋の様子はあまりわからない。しかし、染み付いた煙草と、コーヒーの匂いが鼻に届く。まさに、亜紗深の知る菊川だ。

菊川の眠るベッドにもたれかかった。近くには寝息を立てる菊川の顔がある。――もし、菊川の奥さんになったとしたら、毎朝コーヒーを淹れて、慣れない料理にも励んで。なんて、そんな淡い想像。それが叶うことはないのに。きっと、抱きついたら、いつもの煙草の匂いとコーヒーの匂いが心地良いのだろう、ということも想像してみる。

――もし。もしも、姿があったときに想いを伝えていたら、この想像は現実になっていたのだろうか？ そんなことはわからない。もしもの過去なんて、叶わない未来を想像するよりも遥かに馬鹿らしい。亜紗深は自嘲気味に微笑んだ。同時に、こらえていた涙があふれ出した。――それを止めるすべを亜紗深は知らない。

「……あ」

亜紗深はつい声を上げる。意識がどんどん薄くなっていく。止めようがないくらい、薄く薄く。

亜紗深は暗い部屋で目を凝らした。そして、ペンとメモ用紙を見つけた。ペンを握った指先は、悲しいくらい震えている。

『ずっと好きでした』

それ以上の言葉は書けなかった。もう、それ以上を書く力と、意識が残っていない。何とかメモ用紙はテーブルに放った。ペンが指先から滑り落ちる。

それでも、亜紗深は最後の力を振り絞って菊川の元まで這った。最後に愛しいと思った人のそばへ。――それは最後の恋だから。

布団からはみ出る菊川の手に触れた。透明な指先は、力なく温かい手に触れた。外を走ったせいで、きっと亜紗深の指先は冷たい。けれど、それ以上にその手は温かった。

「――ずっと、好きでした……」

静かに、最初で最後の口づけをする。
――その体は、まるで熱に当てられたチョコレートのように、どろりと溶けてしまうのだろうか。

そんな答えも出ないまま亜紗深は――

*

「亜紗深、どうしたのかなぁ」と、理恵は呟く。メールをしても、一切返信がない。いつもならすぐに返ってくるのに。「でも、まあ、亜紗深だって忙しいだろうしなぁ……」

理恵は口を尖らせながら、携帯を閉じた。どうせまた、月曜日には大学で会えるだろう、と考えながら――

「亜紗深、急に出ていっちゃって……ホント、どうしたのかしら」

「……まあ、色々あったんだろう。年頃の女の子なわけだしな。それより、中々美味しいじゃないか、味噌汁」

父が亜紗深の作った味噌汁をすすった。母も微笑みながら、「まあまあね。私を超えるのはいつかしら？ あの子も恋をしたら、どんどん料理も上達するでしょうからね」と、お味噌汁をすすった。

その成長に心を弾ませる。当たり前のような未来を想像する。大学を卒業して、働いて、そして結婚をして――

「ふー。よっし、作品完成！」

田宮は背伸びをしながら、作品を眺めた。今回の作品は、「愛」をテーマにしている。緑色の背景に、真っ赤なハートが映える作品だ。そういえば、先輩である亜紗深も「愛」をよくテーマにしていたな、と田宮は思い出した。同時に、「あっ、いけない。昨日、月矢先輩に注意されたばかりなのに！」と、田宮は油の匂いの充満する部室を換気するために窓を開け放した。

そして、何の気なしに亜紗深の定位置だった場所に立ってみた。よく亜紗深は窓の外を眺めていた気がするな、と。

窓の先には、校庭の隅にある大きな木。そして――

「ふう」

菊川は息を吐いた。煙草の煙が、ふわふわと空に浮かんでいく。右手に煙草を。そして左手には紙を持っていた。

「――ずっと好きでした、か」

朝起きたらテーブルに置かれていたメモ用紙。泥棒がこんなことをするわけがないし、今までその部屋に住んでいて幽霊が出たこともない。説明がつかない光景だった。

「――告白なんて何年ぶりだろーなぁ」

菊川は苦笑した。それはくすぐったい想いの裏返しなのだが。たちの悪いいたずらなのか、それともストーカーが入り込んできたのか。色々、菊川なりに考えてみた。

いたずらにしては度が過ぎているし、自分にストーカーする奴がいるわけがないと胸を張れる。――悲しいことだが。

「何か、捨てられないよな」

菊川はその紙を胸ポケットにしまった。誰のものかはわからないが、何となく無下に捨ててはいけない気がした。そのメモ用紙の文字は、まるで自分の全てを吐き出すかのように、震えていた。だから――捨ててはいけない気がしたのだ。

菊川は煙草を携帯灰皿に投げ入れ、校舎へと戻って行く。

――携帯灰皿をポケットに押し込む菊川の左手の指先は、透明になっていた。

END.